

ボランティアグループがつくる和歌山県男女共同参画センターの書評誌

この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～



「感情の整理ができる女（ひと）は、うまくいく」

有川真由美著 株式会社 PHP 研究所 2011年（E:こころ・癒し）

容赦なく襲いかかってくる、怒り、寂しさ、恨み、嫉妬、自己嫌悪など負の感情を整理できるのは、たやすくありません。

でも、大丈夫！新しい気持ちを“上書き”するという方法で目の前の現実を受け止め、前に進んでいく勇気をくれる方法をこの本は教えてくれています。

『怒らない女（ひと）』『今日から感情の整理をする12のヒント』『不機嫌にならない女（ひと）』『寂しさと、つらさに負けない女（ひと）』『マイナスの感情を乗り越える女（ひと）』『心の張りをなくさない女（ひと）』の6章構成で、1つのトピックにつき見開き完結型で書かれていて、ニーズに合わせてどこからでも読めます。

「あなたには、感情の整理をして、なりたい自分になれる力が備わっているのです（229ページより）」本書には具体的な事例とともに、そのためのヒントが多く説明されています。確かめるためにも、ぜひ、読んでみてください。（K）



「迷走フェミニズム これでいいのか女と男」

エリザベット・バダンテール著 夏目幸子訳 新曜社 2006年 (A:フェミニズム)

「フェミニズム」とは広辞苑によると「女性の社会上、政治上、法律上の権利の拡張を主張する説。女性解放論」のことである。詳しいことはよく分からないながらも「男性をひたすら攻撃し、女性の権利ばかりを主張するもの」というイメージをもっている男性は少なくないのではないだろうか。

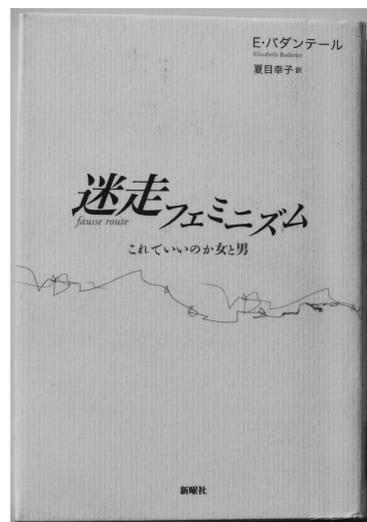
ところが、この本を読めばフェミニズムにも様々な流派があり、論争があることが分かる。著者は、フランスの女性問題の第一人者であるE・バダンテール。200ページ程の読み応えのある本であり、少々難しい内容も含んでいるが、巻末に訳者との対談が収録されており、著者の考え方が分かりやすく語られているので、まずそこから読んでみてもいいと思う。

そこで著者は「フェミニズムの言説は現実の女性の生き方にできるだけ近いものであるべきだと考えます。男性を敵にまわして戦うという態度には断固反対です」と述べている。また、訳者あとがきには「原題の Fausse route は「道はずれる」という意味で、フェミニズム三十年の歴史を振り返り、いかにして「道はずれる」にいたったかを分析している」とある。

どうだろうか。正直言って、私はこの本を読んで「フェミニズム」に対する印象が大きく変わった。男女平等を実現するためには、極端を避けた受け入れやすいフェミニズムであるべきだという著者の考え方はもっともだと思われる。

最新の内閣府の調査によると、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきだ」に賛成という意見が反対を上回ったという。男女共同参画を一から考え直すためにも本書はオススメの一冊である。

最後に余談であるが、訳者の夏目幸子氏の略歴を見ると「1969年和歌山県生まれ」とあったので紹介しておく。(O.S)



※“りいぶる”での分類記号一覧

A:フェミニズム B:労働・法律 C:家族・結婚 D:女性・子どもに対する暴力 E:こころ・癒し F:子育て G:からだ
H:セクシャリティ I:女性史 J:自伝・評伝 K:エッセイ・文学 L:高齢社会・福祉 M:男性学 N:資料・雑誌 O:その他
P:AV 資料 Q:コミック R:NPO サポートセンター所蔵図書



「家族の中の迷子たち」

鈴木雅子作画 椎名篤子原作 集英社 2001年
(D:女性・子どもに対する暴力)

今回とりあげる、この本は椎名篤子著『家族「外」家族』を漫画化したものです。児童精神科医たちから見た、何らかのSOSをだした子供たちの話を取材に基づいて描かれたフィクションです。

子供たちが病院にやってくる理由は、かかとをついて歩けないとか喘息とか拒食とかの体の症状で来院するのですが、児童精神科医の目から見ると、そこには何か家族関係の問題があり、子供がSOSをだしているのだろうと見ます。

子供を入院や通院させ、親と話し合えずこしずつ関係を改善していくなかで解決にむかっていく様子を描いています。そして、小児科医、精神科医はいても、子供を専門に扱う、児童精神科医が少ない点やチーム医療の必要性を指摘しています。

“りいぶる”にコミックコーナーがあります。子育てや虐待、女性問題などを考えさせられる漫画が所蔵されています。「字がたくさんあるのはちょっと」という方は漫画から始められるのがいいのではないのでしょうか。(か)

「女・女」

山本容子著 中央公論社 1998年 (K:エッセイ・文学)

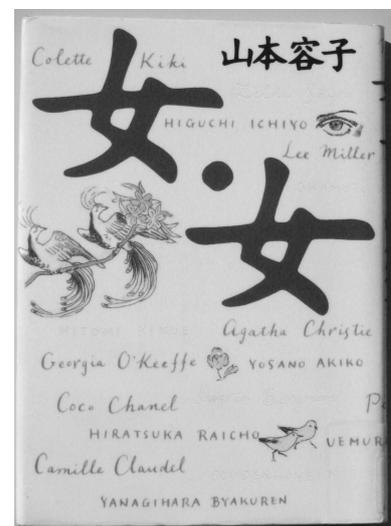
銅版画家・山本容子が『婦人公論』の表紙絵として描いた女性像をまとめた一冊である。

古今東西から選ばれた40人の美しき才媛たちが、きらぼしのように並んでいる。が、目次がないので、全部開かないと、40人の女性がいったい誰たちなのかわからない。しかし、トランプを切るみたいにパラパラとページを繰って、偶然開いたところを読むのも楽しいかもしれない。

どの人のも開くと、右頁には、「～する女・誰々」という題と本文、左頁にはその「～する女」の絵が描かれている。ちなみに、主な職業は作家、画家、女優など。生国は、日本、アメリカ、ロシアなどである。

「評伝からヒントを得て」描いたというが、輝かしい足跡、エピソード、生きざま等を簡潔にまとめ、なおかつ読む者に想像を広げさせる文章に感銘を受けた。厳選された言葉、確かな構成で本質を表現する、まるで俳句のような文だと思った。

読後、絵を見る。絵に奥行きが出て、あれこれ思いが巡る。また文を読み返す。右頁にいたり、左へいたり楽しい。こうして筆者に導かれ、すばらしい「～した」40人の女たちに出会う旅ができる稀有な本である。(大空)



「さみしい王女・下」

金子みすゞ童話全集⑥ 矢崎節夫監修 JULA 出版局 2004年 (K:エッセイ・文学)

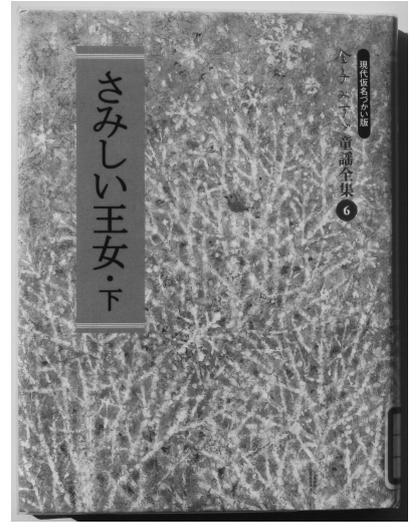
この詩集のなかには「こだまでしょうか」や「私と小鳥と鈴と」など90編ちかい詩があるが、そのなかに「不思議」という次の詩がある。

私は不思議でたまらない、/黒い雲からふる雨が、/銀にひかっていることが。

私は不思議でたまらない、/青い桑の葉たべている、/蚕が白くなることが。

私は不思議でたまらない、/たれもいじらぬ夕顔が、/ひとりではらりと開くのが。

私は不思議でたまらない、/誰にきいても笑ってて、/あたりまえだ、ということが。



4連の短い詩だが、これは読んでも楽しいが、「私は不思議でたまらない」のあとに、自分で言葉を付け足していくのも楽しい。

例えば、子どもなら、次のような言葉を思いつくだろう。

私は不思議でたまらない、/葉っぱは夏に緑で、/秋になると黄色になるのか。

また、野球をしている子なら、次のように書くかもしれない。

ぼくは不思議でたまらない、/なぜ野球にはうてるときと、/うてないときがあるのか。

あるいは、飼育委員をしたことがある子なら、次のように言うかもしれない。

私は不思議でたまらない、/人間は二足歩行できるのに、/なぜウサギはできないのか。

子どもだけでなく、大人にとっても多くの不思議が自分のなかに生まれてくる。「当たり前」のフタを取れば、私たちのなかには、多くの不思議があふれてくるだろう。

金子みすゞの詩集には、これ以外に『美しい町・上下』『空のかあさま・上下』がある。(武西良和)



この本 よんだ? 第2号 (2013年3月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

・今回は、より読みやすくなるよう、タイトルを大きくするなどレイアウトを工夫してみました。少しでも多くの人にご覧いただきたいと思っています。何とか第2号できました。

☆ボランティアスタッフ募集!!!

あなたも書評を書いてみませんか? 興味のある方は libreplus@yahoo.co.jp までe-mailでご連絡ください。